

大阪府立茨木高等学校 学校運営協議会 令和3年度委員等

委員

添田 晴雄（会長）
岩井 八郎（副会長）
柴田 仁
中村 卓
樫本 佳子
乾 麻里

校長及び事務局員

山上 浩一（校長）
山脇 和美（教頭）
門野 良彦（事務長）
本管 克江（首席）
森 登紀子（首席）
森 佳希（教務主任）
藪 麻智子（進路指導主事）
都 浩司（生徒指導主事）

令和3年度 第1回学校運営協議会議事録

日時：令和3年6月12日（土）14:00～15:00

場所：大阪府立茨木高等学校 視聴覚教室

出席者：【 委 員 】 添田晴雄、岩井八郎、柴田仁、中村卓、樫本佳子、乾麻里

【校長・事務局】 山上浩一、山脇和美、本管克江、森登紀子、森佳希、藪麻智子

1. 校長挨拶
2. 委員紹介・事務局職員紹介
3. 議事
 - ① 本年度の「学校経営計画及び学校評価」について
 - ② 教科書選定について
 - ③ その他
 - ④ 次回運営協議会日程

<校長挨拶>

・4月からここまでの学校の様子を報告。今年度の入学式は、来賓をお招きすることはできなかったが、予定通り4月8日に、保護者にも参列していただく中で実施することができた。その後、まん延防止等重点措置、緊急事態宣言の発出という流れの中で、遠足は延期、芸術鑑賞（文楽）は中止となった。また、第1学年の「スプリングセミナー」については、京都大学を訪問することはできなかったが、本校体育館にて、リモートでの記念講演、リモートと対面を組み合わせたパネルディスカッションを実施することができた。3年生の宿泊野外

代替行事は、当初、大阪市内のホテルを会場として実施する予定であったが、校内実施となり、宿泊野外行事で訪れるはずであった東北の人々とリモートで交流し、震災学習・探究学習を実施した。現在は、昨年度中止となった体育祭を、感染防止対策を講じながら、何とか工夫して実施しようと努力しているところである。

<事務局からの「議事」に係る説明>

①本年度の「学校経営計画及び学校評価」について

今年度の重点目標、具体的な取組み計画・内容等について「学校経営計画」に沿って説明。
その後、各事務局員より、昨年度(令和2年度)の取組みを踏まえた今年度の展望等を説明。

*今春の進路状況について

- ・本校生の多くが目標としている大学の合格数は大幅に増加している。この学年から全クラス文理学科になったこと等、さまざまな要因が考えられるが、2年生の終わりからの1年間、楽しみにしていた大切な行事等が中止となってしまった、その悔しさをエネルギーに変えて、勉強にぶつけて頑張ったと言えるのではないかと考える。

*学問発見講座・卒業生講座について

- ・大学等の研究機関や専門職・一般企業の第一線で活躍されている方々を招聘し、生徒に対して講義をしていただく取組みである。「学問発見講座」は主に学問に対する興味・関心を育てる取組みであり、「卒業生講座」は学問分野にとどまらず、社会人としての心構えや自分軸の立て方等に関わる取組みである。昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、例年7月実施の「学問発見講座」を見送った経緯があったため、「卒業生講座」を例年の10講座から22講座へと拡大して実施した。今年度は、例年通り(対面での講義)の実施を予定しており、7月の「学問発見講座」は14講座を予定している。

*課題研究について

- ・毎年、第2学年の生徒たちが、それぞれの分野の講座の中で、自分たちでチームを組み、自分たちで研究のテーマを決めていく。そのため、毎年、実にさまざまなテーマが出てくる。指導者側が、昨年度の生徒たちが研究したテーマを引き継いでほしい、という思いを持つこともあるが、そううまくはいかないようである。ある程度研究が進んだところで、「GLHS課題研究合同発表会」及び「WWLコンソーシアム構築支援事業フォーラム」で発表する代表を選出することになる。代表として発表したいと思うチームが自ら名乗りを上げ、その時点までの研究内容を校長、教頭、関係する教科の教員、京都大学大学院から来ていただいているアドバイザー等へプレゼンテーションする。選出されたチームも、残念ながら選出されなかったチームも、その後、外部での発表会だけでなく、校内の発表会に向けて、それぞれの研究成果をまとめていくことになる。昨年度は、外部の発表会はどちらもリモートで実施された。校内発表会は、オーラル発表、ポスターセッションともに、密を避ける等、感染予防を講じながら実施した。

*高大連携について

- ・昨年度は、新型コロナウイルス感染拡大を受けて、中止となったプログラムもあった。本校独自のプログラムでは、「東京スタディツアー」「京大研究室訪問」等である。また、実際に大学等を訪問することはできないが、リモートで開催されたプログラムも多かった。例年、多くの本校生が参加を希望するプログラムも、リモート開催となると、参加者が減少した。一方で、実際に大学を訪問できるプログラムには希望者が多数あり、「実際に訪問できる」ということの持つ重要性を感じた。

＊観点別評価について

- ・令和4年度からの「観点別学習状況の評価」実施に向けて取り組んでいる。前期中に、各教科・科目において、評価する項目及び観点とその評価方法を取り決め、評価及び評定をつけることを試行し、後期に各教科からの実施方法と問題点の集約等を行い、学校としての評価方法を作成していく予定である。

＊「グローバル」に視点を置いた取組みについて

- ・昨年度の「茨木ブラザーズ&シスターズプログラム」は、教室にいる第1学年の生徒たちをZoomで留学生とつなぐ、リモートでの実施となった。久敬会でレンタルいただいているWi-Fiを駆使して、前・後半4クラスずつに分けての実施であった。国際交流が難しい状況下において、なんとか成功させようと生徒・教員ともに工夫を重ねた。このB&Sの実施後、後に続く行事の「リモートでの開催」が前向きに検討されるようになった。
- ・例年受け入れている長期留学生は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、メキシコからの来日時期が遅れたが、昨年12月から今年7月までの予定で現在2年生のクラスで生徒たちと共に学校生活を送っている。
- ・「英語イマージョンプログラム」は、感染防止対策を講じながら、対面で実施することができた。参加した生徒たちは、2日間英語のネイティブ講師による少人数指導を受け、英語運用能力を高めることができた。
- ・「Beyond_i プログラム」は、昨年度から始めた取組みである。日本国内（京都大学・大阪大学・神戸大学）に正規留学しているさまざまな国出身の大学生・大学院生と4日間集中的に英語を用いて議論する、というプログラムである。このプログラムでは、「英語」はコミュニケーションツールであり、「SDGs についての理解を深め、議論を通じて課題解決の道筋を探る体験をする」ことを目標としている。参加した生徒たちにとっては、大きな刺激になったと考えており、今後も継続していく予定である。

②教科書の選定について

府立高等学校の教科書選定のしくみを説明。第2回学校運営協議会で、選定のご報告とともに、委員の皆さまからのご意見を伺う予定。

③その他 特になし

<質疑応答>

委 員：学校内の Wi-Fi 環境、ネットワーク環境はどのようになっているのか。

事務局：現在のところ、久敬会でレンタルしていただいている 3 台の Wi-Fi を、工夫しつつ使用させていただいている。現状の学校情報ネットワークは回線が弱く、なかなか思うようなことができない状況である。

委 員：母校への支援として、何かできることがあれば同窓会でも検討するが、生徒には一人一台端末が配備されるが、それについてはどうか。

事務局：配備されてから、実際にどのようなことがどの程度できるのかを試してみないと分からない状況である。

委 員：十分な学習環境を確保するためには、「学校と外部」「教室内（生徒どうし・教員と生徒）」「学校と各家庭」の 3 つがそれぞれつながることが必要である。

事務局：生徒用端末は、持ち帰りを前提として考えているため、生徒の各家庭の Wi-Fi 環境等についてもこれから確認していくところである。（2、3 年生については昨年度も確認した。）

委 員：課題研究の代表チームの研究要旨について、タイトルや Abstract を英語で書いているのはなぜか。

事務局：GLHS 合同発表会に提出する様式に従っている。英語での発信がセットになった様式となっている。また、WWL コンソーシアム構築支援事業フォーラム AL クラスのチームは、本来昨年夏にドイツの研究施設を訪問する予定であったが、今般の社会状況により、オンラインでドイツの研究者とディスカッション等をする機会を持った。その際も双方英語を用いての交流となった。

委 員：課題研究の発表会は、コンペのような形式をとるのか。

事務局：GLHS 合同発表会は、例年は審査の結果、「大阪府教育委員会賞」「大阪大学賞」が授与されるが、今回は、発表がオンラインということもあり、受賞チームを選出することはなかった。

委 員：毎年、コンクール・コンテスト等の実績を見ていても、生徒たちは実にさまざまなものに挑戦し、成果を得ているように感じられる。

事務局：GLHS 合同発表会のように、学校として取り組むものもあるが、生徒自らが見つけてきて、応募するものも多い。

委 員：観点別評価について、観点別評価は、フィードバックが前提で、何で何を評価するのかを伝えることが必要である。生徒と教員とが価値観を共有できるような評価のしくみ作り、学校として、評価してよかった、と思えるしくみ作りが大切である。現在、既存のもので、そのような、いわば「はりあい」のあるものはあるのか。

事務局：例えば、理科の実験レポート等がそうである。単なる実験の記録を書くという作業ではなく、その実験によって自分自身が発見したこと等が書かれていると、レポートを課してよかった、と思えることがある。

- 委員：教員がやりがいを感じられる、評価のしくみを作っていく必要がある。高校での観点別評価の工夫、茨高としての工夫を作っていくことが大切である。
- 委員：SNSについて、最近では、生徒たちはあっという間にクラスの中での連絡手段を作り、その中でさまざまな問題も生じていると聞くが、茨高ではどうか。
- 事務局：本校でも、生徒たちは、自分たちの連絡手段として、クラスLINE等を作っているようである。例年、1年生には入学してからなるべく早い時期に、講師を招き、「SNS講習会」を実施している。今年度も6月1日に実施し、生徒たち自身が、SNSをどのように用いるべきかを考える機会としている。
- 委員：学校が取り組む目標の一つに「リーダーの育成」があり、毎年さまざまな取組みが行われているが、目標を設定し、さまざまな取組みを評価し、改善していくというしくみが見て取れる。
- 委員：さまざまな取組みが行われていることが報告からわかるが、一部の生徒の取組みではなく、全生徒が係われる取組みがあれば、と思う。希望者、ということになると、部活動との関係でなかなか参加しづらいこともある。
- 事務局：学年全体が対象の取組みもあるが、各取組みの定員の関係で、なかなか全員対象とするのが難しい取組みもある。
- 委員：今年度の東京スタディツアーはどうなるのか。この取組みは、卒業生の研究室を訪問したり、東京久敬会のメンバーと交流したりする等、生徒たちからすると、「先輩」をモデルとして自らの進路を考える良い機会となるのだが。
- 事務局：新型コロナウイルス感染拡大、東京オリンピック・パラリンピック等を考慮すると、残念ながら今年度も実施は困難と考えている。
- 委員：報告の資料等を見ると、昨年度は「体育祭」と「妙見夜行登山」が実施できないという状況の中でも、いろいろとよくやっていると思う。
- 事務局：宿泊野外行事も、昨年度中止となった行事の一つで、今年度に入ってから代替行事として、校内での実施となったが、なんとか工夫してやり遂げることができた。とはいえ、昨年度中止となった行事を考えると、1年間のブランクというのは大きいのではないかと思う。一度途切れたものを復活させ、次へバトンタッチをするのはとてもたいへんではないかと思う。
- 委員：例年は、すべて生徒がやる、というものでも、今年度に限っては、場合によっては、少し先生たちからの働きかけがあってもいいのではないか。
- 委員：それもあるが、おそらく、何かがなくなっても、別の何かが出てくる。歴代の茨高生も、ずっとそうやってきたのだから。この状況は、何か新しいことができる可能性を秘めた状況だともいえる。

④次回学校運営協議会の日程

第2回学校運営協議会 令和3年10月16日（土） 14：00～